

平成 22 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2008

課題番号：19592517

研究課題名（和文） 再発期肺がん患者の家族の情緒的安定を支援するプログラムの開発と評価

研究課題名（英文） Development and Effectiveness of a Program for Supporting the Psychological Stability of Families of Patients with Recurrent Lung Cancer

研究代表者

林田 裕美 (HAYASHIDA YUMI)

大阪府立大学・看護学部・准教授

研究者番号：10335929

研究成果の概要：

本研究の目的は、再発期肺がん患者の家族の情緒的安定を支援するサポートプログラム（以下、プログラムとする）を開発、実施し、プログラムの効果を明らかにすることである。本研究の対象者は初発期肺がん患者の家族も含む5名の肺がん患者の家族であった。プログラムは既存のものからスケジュールを変更して提供し、全対象者がプログラムすべてに参加できた。プログラム終了後には対象者の心理的負担感を軽減するが、持続的ではない傾向にあった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：肺がん, 再発, 家族, サポートプログラム, サポートグループ, がん看護

1. 研究開始当初の背景

日本では、肺がんの罹患者は増加し続け、死亡率も高い。最近ではヘリカルCTなどの導入により、早期発見・治療が可能になっており、肺がん患者ががんと共に生活する期間が延長することが推測される。しかし、肺がんは、進行して発見されることが多く、予後が良い疾患とはいえない。手術を受けられたとしても、再発や転移のために終わりのない治療を継続して行わなければならない場合もある。このような再発期の状況において、患

者は初期治療を受けたときよりも多くの身体的・心理的・社会的・霊的苦痛を抱える。そして、同時に、患者のそばにいる家族もまた、同様の苦痛を抱えることになる。

米国では、地域や施設で様々な団体により、がん患者と家族のグループに対するサポートプログラムが提供されている。これらは、がん患者と家族の両者を対象にしたものと、別々に分けたものがあり、教育的プログラム、体験的プログラム、気持ちの共有などが実施されている。Spiegelらは、“がん患者と家族

ががんに向き合うとき、サポートグループからソーシャルサポートと精神的な支えを得ることができると”述べている (Spiegel & Classen ; 2003)。日本でも、米国をモデルにして、季羽らの「がんを知って歩む会」に代表される、がん患者と家族のグループを対象にしたサポートプログラムが展開されるようになった。しかし、日本では、現在までに、家族だけを対象にしたグループづくりとサポートプログラムの開発と評価はされていない。Spiegel らは、家族が抱える問題は患者ががんであることからくる二次的な問題であり患者の問題とは別であること、家族は、他の家族の体験を見てこれからを予期することができること、患者と家族が別のグループに参加することでお互いに意識しあい、患者家族間のコミュニケーションが促進されること、また、患者と家族のプライバシーを尊重することができることから家族単独のグループの必要性について述べている。

(Spiegel & Classen ; 2003)。今日、家族は、患者の最も身近なサポート源となる一方で、サポートを必要としている存在であると認識されている。保坂は、“がん患者の家族には自分が患者を失うかもしれないという傷つきやすい患者としての立場と、治療者としてがん患者のサポートを行う治療者としての立場がある” (保坂, 2002) と述べており、患者が医療機関で受けるように、家族へのサポートの必要性が認識されている。しかし、医療機関においては、個別的な対応には限界があり、行き届いていないのが現状である。

私たちは、本研究のプログラム開発のために、再発期肺がん患者と家族のストレス・コーピングについて事前調査を行った。その中で、再発期肺がん患者の家族は、心配、不安、困難などの気持ちの辛さや、生活面での問題、医療者との問題を抱えていることが明らかとなった。このことから、家族の気持ちを受け止め、生活上の問題に対する解決策や方向性を提案できる支援、患者の介護に専念するような患者志向のコーピングを認めながらも、他者からの支援を受けるなどの周囲志向のコーピングを強化する治療施設外での意図的情報交換や感情表出の場としてサポートプログラムの必要性が示唆された。この調査の結果をもとに、文献等を検討し、私たちは再発期肺がん患者の家族のためのサポートプログラムを考案した。そして、再発期肺がん患者の家族が抱えている心理的負担を軽減する場を提供し、家族自身が自分を認め、他の家族や医療者などからのサポートを得て、心の安定をはかることができるように支援することとした。本サポートグループではグループ内での情緒的サポートによる効果も期待でき、「肺がん患者の家族のためのサ

ロン」としてサポートグループをつくり、サポートプログラムを実施することは、医療機関では十分な支援が得られない家族にとって、貴重な社会資源となると考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、再発期肺がん患者の家族の情緒的安定を支援するサポートプログラム (以下、プログラムとする) を開発、実施し、プログラムの効果を明らかにすることである。また、今後の発展に向けてサポートグループの運営における課題を検討することである。

3. 研究の方法

(1) 対象：肺がん患者の家族とした。既存のプログラムは再発期肺がん患者の研究結果から開発されているが、肺がんは進行が早く、初発期でも再発期と同様の治療が行われること、初発期から再発期へと患者の病状が変化していくだろうことなどから、初発期の肺がん患者の家族も含めることとした。

(2) 方法：

①プログラムの開発

再発期肺がん患者の家族が抱えている心理的負担を軽減する場を提供し、家族自身が自分を認め、他の家族や医療者などからのサポートを得て、心の安定をはかることができるように支援することを目的とし考案した既存のプログラムを基本に、先行研究の結果を加味して検討し、開発した。

②プログラムの実施

対象者の募集：協力施設に募集チラシを掲示してもらい、FAX、郵送にて参加申込を受けた。

プログラムのスケジュール：1週間毎2回、1回120分とし実施した。

プログラムの内容：

(第1回)

- ・家族がおかれている状況や気持ちについての意見交換
- ・患者や家族の体験、患者とのコミュニケーションについての情報提供

(第2回)

- ・家族間の近況報告、患者とどのように過ごしたいかなどの意見交換
- ・患者の体力維持と低下予防のために家族ができること、ストレスの発散方法、呼吸法・利用可能な社会資源と医療者とのコミュニケーションなどの情報提供

③プログラムの評価

プログラムの効果の評価：

対象者の心理的負担の程度を測定するために POMS 短縮版 (Profile of Mood States-Brief Japanese Version)、新版 STAI (State-Trait Anxiety Inventory-JYZ) を用いる。対象者自身への肯定的な認知の程度を

測定するために GESS(General Self-Efficacy Scale)、患者や医療者などと接するときを感じる負担感の程度を測定するために対人ストレス尺度また、家族が受けていると感じるサポートについてソーシャルサポート尺度を用いて測定し、評価した。測定は、プログラム実施前、プログラム終了後、プログラム終了 2 週間後に行った。

プログラム内容と運営の評価：

プログラムの各回終了時に、プログラム内容の評価を自記式質問紙を用いて回答を得、評価した。評価する項目は、自分の意見や気持ちを出ることができたかや、意見交換の話題、提供された情報への関心などであった。評価は「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の 4 段階で行った。また、プログラム運営の評価は、プログラム終了時に自記式質問紙を用いて回答を得て行った。評価項目は開催場所、雰囲気、開催時間、所要時間、進行の順調さなどであった。評価は「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の 4 段階で行った。

(3) データ収集期間：2007 年～2009 年

(4) 分析：

①プログラムの効果の評価では、POMS、STAI、GESS、対人ストレス尺度、ソーシャルサポート尺度をプログラム実施前後において記述的に分析した。

②プログラム内容と運営の評価は、それぞれの質問紙より得られた回答を記述的、質的に分析した。

(5) 倫理的配慮：

研究の目的、方法、意義などについて、文書を用いて説明し、研究参加の同意を得た。研究への参加は自由意思によるものであり、参加の拒否、および途中中断ができ、その際にも何ら不利益を被ることがないこと、プログラム提供中に話したくない場合は話さなくてよいこと、身体・心理的な苦痛が生じた場合には休憩をとるなどして再開することなどを説明し、保証した。また、研究で得られたデータは本研究のみに使用し、個人の匿名性は保たれることなどを説明し、保証した。

本研究は、大阪府立大学看護学部研究倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

(1) プログラムの開発

プログラムは既存のプログラムを基本に先行研究の結果や文献を加味して開発された。先行研究において、プログラム内容については良好な評価を得ており、わずかではあるがプログラムの効果がみられる傾向にあったことから、改訂はせず、提供することとした。しかし、既存のプログラムは 1 週間毎 3 回、1 回 90 分のスケジュールで提供されていたため、対象者は 3 回すべてに参加するこ

とが不可能な状況にあった。そのため、1 週間毎 2 回になるように、各回の情報提供を構成し直し、1 回 120 分として、提供するように、プログラムを改正した。これにより、対象者はプログラムすべてに参加できた。

(2) 対象者の概要

本研究の対象者はプログラムの提供に参加希望を申し出た男性 2 名、女性 3 名の 5 名であった。平均年齢は 47.8 歳 (28～80 歳) で、患者との続き柄は配偶者が 3 名、子ども 2 名であった。5 名のうち、2 名が再発期肺癌患者の家族であり、他 3 名は初めて肺癌の治療を受ける患者の家族であった。また、4 名の対象者の家族である患者が化学療法を施行予定、または施行中であった。このことから、初発期であっても再発期肺癌患者の家族と同様の状況におかれており、抱える問題も類似していると考えられた。

(3) プログラムの効果の評価

POMS や STAI において、プログラム終了後では心理的負担の軽減が見られるものの、2 週間後にはプログラム実施前と同じレベルに戻っていた。ソーシャルサポート尺度も同様の傾向であった。また、GESS では、プログラム実施前、終了後、終了 2 週間後で、ほとんど変化が見られなかった。本研究の 5 名の対象者は、患者を直接介護し、支える立場にあった。プログラム提供の 2 週間の中で、それぞれの患者が治療を待っている、あるいは渦中にあり、対象者の状況が変化しなかったことや、対象者の抱える問題を解決できるような個別性がプログラムになかったためと考えられる。しかし、ほとんどの尺度において、終了後には改善がみられたことから、一過性の効果はあると推察できる。今後は、効果的なプログラムの提供間隔の検討、効果を持続していくための取り組みが必要と考えられる。

(4) プログラムの内容と運営の評価

プログラムの内容の評価では、ほとんどの項目で「まあまあそう思う」から「とてもそう思う」と答えた対象者が多く、おおむね良好の評価を得ることができた。本サポートグループでは、プログラムの提供中、対象者自身の気持ちや悩みなどの表出があり、対象者間の意見交換が活発に行われた。そのため、お互いを理解でき、辛いのは自分だけではないという思いを強くしたようである。また、未治療の家族をもつ対象者に治療中の家族をもつ対象者が対応方法や生活のアドバイスをする場面がみられた。ここでは Spiegel らが、“がん患者と家族ががんに向き合うとき、サポートグループからソーシャルサポートと精神的な支えを得ることができると”

(Spiegel & Classen ; 2003) 述べていることが実践されていた。さらにサポートグループとして初発期と再発期患者の家族を混同

したことによって、先の見通しを付けることができた。当事者同士の意見交換は、より個別的で具体的な解決策を導きだしている。このため、対象者の気持ちの表出や意見の提示がスムーズにできるようなグループダイナミクスを意図的に作り上げていく必要がある。また、プログラム内容として、情報提供と意見交換の配分に融通性をもたせることも必要と考えられる。

運営についての評価は、対象者は保すべての項目で「まあまあ思う」から「とても思う」と答えており、良好であった。これは、使用した施設が対象者の家族が治療を受けている施設であったこと、対象者数と使用した部屋の広さの空間的なバランスも良かったことなどが考えられる。開催時間については、個人の事情もあるため、一概には決定できないが、生活スタイルの多様性に適応できるように考慮する必要がある。所要時間については、当初1回を120分で予定したが、対象者からも120分程度が適切との意見を得ることができた。進行も順調であったとの評価を得ることができたことから、プログラムのスケジュールは、現行通りで確立できると考える。

対象者からは、「また（このような会を）開催してほしい」「このような集まりは必要だと思う」という意見があり、今後もできる限りプログラム提供の場を設定していく必要があると考える。さらにこのサポートグループが、より多くの他の肺がん患者の家族と支え合えるように活動を発展させられるよう、支援していくことも必要であろう。

(5) 今後の展望

本研究においては、対象者が少なく、記述的にプログラムの評価を行った。しかし、一過性にもサポートプログラム、サポートグループの効果が得られたこと、何よりも対象者からの希望があることから、課題は多いが、継続的にプログラムの提供をしていくことが望ましいと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計1件)

① Yumi Hayashida, Satomi Yoshida, Kyoko Tanaka, Maki Koseki, Tsuyako Nagata, Hiroko Takeshita, Akane Hashiya, Sadako Nagao, Satomi kitamoto; Effectiveness of a Program for Supporting the Psychological Stability of Families of Patients with Recurrent Lung Cancer, 15th international conference on cancer nursing, August 17-21,

2008, Singapore

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ

http://www.nursing.osakafu-u.ac.jp/center/project_1.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

林田 裕美 (HAYASHIDA YUMI)
大阪府立大学・看護学部・准教授
研究者番号：10335929

(2) 研究分担者

田中 京子 (TANAKA KYOKO)
大阪府立大学・看護学部・教授
研究者番号：90207085
橋弥 あかね (HASHIYA AKANE)
大阪府立大学・看護学部・助教
研究者番号：00457996
竹下 裕子 (TAKESHITA HIROKO)
大阪府立大学・看護学部・助教
研究者番号：10437668
梶村 郁子 (KAJIMURA AYAKO)
大阪府立大学・看護学部・助教
研究者番号：40521498

(3) 連携研究者

田中 登美 (TANAKA TOMI)
大阪府立大学・看護学部・講師
研究者番号 80316025